BINOS vol.8:73-76(2001)

食痕から調査したオオタカの食性

森　要[1]

Kaname MORI : Diet of Goshawk *Accipiter gentilis* examined from food remains

はじめに

藤沢市北部では95年以来オオタカが繁殖しており，藤沢探鳥クラブオオタカ調査グループなどにより継続的に生息調査が行われてきた．本稿ではその調査の延長として筆者が行った食痕による食性の調査について結果を報告する．

調査の方法

本地域のオオタカは同調査グループの周年調査で11月頃より増加し，夏場はかなり減少することが知られている．その結果を踏まえて，1999年11月～2000年7月及び2000年11月～2001年4月の２期に分けて，同地域でオオタカが解体し残した鳥の羽を主に食痕を調査した．事前調査で，オオタカの食痕は人手が入った畑地，植木林及び見通しがよい草地，裸地では殆ど見つからず，大部分は下草が少ない林床で見つかっているので，森林内とそれに接する数メートルの巾と合わせて23.5haの範囲を月数回探索し，採取した羽より鳥の種を同定し食痕の場所と共に記録をした．また，羽の傷み具合から発生月を推定した．記録の重複を防ぐために，一部小さな羽は小鳥の巣材として現場に残して，他は回収をした．

なお，この地域にはフクロウが生息し，ノスリの越冬個体も確認されている．フクロウの食性に鳥類が含まれているが，羽は余り抜かずに羽ごと食べて，羽軸が折れた羽を少数残すのを観察している．また，ノスリの食性で鳥は１割以下といわれており(石沢・千羽,1967)，ノスリは森林内に余り入らない習性も考えると，この両者の食痕が今回のデータに混じっている確率は低いと判断している．

調査の結果

1.食痕の内訳

確認できた食痕は第１期の調査では19種，115例(表１)，第２期は12種，89例(表２)で，合計22種，204例であった．図１にその内訳を示す．オオタカの食性は鳥が９割を占めるといわれており(遠藤,1996)，食痕は鳥以外は発見しづらいこともあり，本地域でも２例を除いて全て鳥であった．森林性ではないドバト，ムクドリ等の羽が林内にあることから，オオタカは周囲の畑地でも狩をし，林床へ運んで解体していると推定された．

1:〒252-0802 藤沢市高倉507-17

キーワード：オオタカ・食痕・食性　Key words : Goshawk,remains,diet

表１.第１期に発見されたオオタカの食痕

A:針葉樹林 B:混交樹林 C:広葉樹林 D:竹林 E:その他

NO	食痕種	発生年月	場所	NO	食痕種	発生年月	場所	NO	食痕種	発生年月	場所
1	ドバト	99/11	C	41	ヒヨドリ	00/1	B	81	ツグミ	00/2	B
2	カケス	〃	B	42	ヒヨドリ	〃	A	82	ツグミ	〃	A
3	ドバト	〃	D	43	オナガ	〃	A	83	キジバト	〃	C
4	キジバト	〃	D	44	ヒヨドリ	〃	A	84	ヒヨドリ	〃	A
5	ドバト	〃	C	45	シロハラ	〃	A	85	キジバト	〃	A
6	アオバト	〃	D	46	ヒヨドリ	〃	A	86	キジバト	〃	B
7	ドバト	〃	E	47	キジバト	〃	D	87	ドバト	〃	A
8	ヒヨドリ	〃	D	48	キジバト	〃	C	88	ヒヨドリ	〃	A
9	ヒヨドリ	〃	B	49	ムクドリ	〃	B	89	ドバト	00/3	A
10	ドバト	〃	D	50	ヒヨドリ	〃	B	90	キジバト	〃	E
11	カラスＳＰ	〃	B	51	キジバト	〃	D	91	ムクドリ	〃	D
12	ドバト	99/12	A	52	ツグミ	〃	A	92	キジバト	〃	D
13	ドバト	〃	C	53	ドバト	〃	C	93	シメ	〃	A
14	キジバト	〃	A	54	キジバト	〃	D	94	ドバト	〃	A
15	ドバト	〃	A	55	ヒヨドリ	〃	A	95	ドバト	〃	A
16	キジバト	〃	A	56	ムクドリ	〃	B	96	ドバト	〃	A
17	キジバト	〃	D	57	ヒヨドリ	〃	B	97	ドバト	00/4	A
18	キジバト	〃	D	58	シロハラ	〃	C	98	キジバト	〃	D
19	オナガ	〃	A	59	ヒヨドリ	00/2	B	99	ドバト	〃	D
20	ドバト	〃	D	60	アカハラ	〃	A	100	キジバト	〃	B
21	キジバト	〃	D	61	シジュウカラ	〃	C	101	キジバト	〃	A
22	キジバト	〃	B	62	コサギ	〃	E	102	キジバト	00/5	D
23	キジバト	〃	B	63	キジバト	〃	B	103	キジバト	〃	D
24	キジバト	〃	D	64	キジバト	〃	B	104	ドバト	〃	A
25	ヒヨドリ	〃	D	65	ドバト	〃	B	105	コジュケイ	〃	C
26	キジバト	〃	A	66	ムクドリ	〃	A	106	キジ♀	00/6	B
27	キジバト	〃	C	67	コジュケイ	〃	A	107	ドバト	〃	A
28	ヒヨドリ	〃	A	68	キジバト	〃	D	108	ドバト	〃	A
29	シロハラ	〃	A	69	ヒヨドリ	〃	A	109	ウコッケイ	〃	E
30	キジバト	〃	D	70	キジバト	〃	C	110	アオバト	〃	C
31	キジバト	〃	C	71	オオコノハズク	〃	A	111	ヒヨドリ	00/7	A
32	キジバト	00/1	C	72	キジバト	〃	C	112	ドバト	〃	A
33	シロハラ	〃	C	73	ツグミ	〃	A	113	ムクドリ	〃	A
34	カラスＳＰ	〃	A	74	ドバト	〃	A	114	ドバト	〃	A
35	キジバト	〃	B	75	ヒヨドリ	〃	A	115	ドバト	〃	A
36	ヒヨドリ	〃	B	76	キジバト	〃	A				
37	ドバト	〃	B	77	キジバト	〃	C				
38	キジバト	〃	B	78	カシラダカ	〃	B				
39	ヒヨドリ	〃	B	79	シジュウカラ	〃	C				
40	ヒヨドリ	〃	B	80	シジュウカラ	〃	A				

表２.第２期に発見されたオオタカの食痕

A:針葉樹林 B:混交樹林 C:広葉樹林 D:竹林 E:その他

NO	食痕種	発生年月	場所	NO	食痕種	発生年月	場所	NO	食痕種	発生年月	場所
1	ノウサギ	00/11	B	31	キジバト	00/12	B	61	キジバト	01/2	D
2	ドバト	〃	A	32	ヒヨドリ	〃	A	62	キジバト	〃	B
3	ヒヨドリ	〃	C	33	キジバト	〃	B	63	ドバト	〃	C
4	メジロ	〃	A	34	シロハラ	〃	C	64	ドバト	〃	B
5	ドバト	〃	C	35	トラツグミ	〃	C	65	ドバト	〃	A
6	ドバト	〃	A	36	ヒヨドリ	〃	B	66	キジバト	〃	C
7	ヒヨドリ	〃	E	37	キジバト	〃	E	67	ノウサギ	〃	C
8	キジバト	〃	D	38	キジバト	〃	D	68	ヒヨドリ	〃	B
9	ドバト	〃	A	39	キジバト	〃	D	69	キジバト	〃	A
10	ムクドリ	〃	E	40	キジバト	〃	D	70	キジバト	〃	A
11	シロハラ	〃	C	41	キジバト	〃	B	71	ヒヨドリ	01/3	D
12	ヒヨドリ	〃	B	42	キジバト	〃	A	72	ムクドリ	〃	A
13	ヒヨドリ	〃	A	43	キジバト	〃	A	73	ヒヨドリ	〃	C
14	キジバト	〃	B	44	ドバト	〃	B	74	キジバト	〃	D
15	オナガ	〃	D	45	キジバト	〃	A	75	ムクドリ	〃	B
16	カラスＳＰ	〃	B	46	キジバト	〃	D	76	ムクドリ	〃	C
17	ドバト	〃	C	47	カラスＳＰ	01/1	C	77	キジバト	〃	C
18	ドバト	〃	B	48	キジバト	〃	A	78	ドバト	〃	C
19	キジバト	〃	B	49	メジロ	〃	A	79	ドバト	〃	A
20	ドバト	〃	D	50	カラスＳＰ	〃	A	80	ドバト	〃	C
21	コジュケイ	〃	D	51	キジバト	〃	B	81	キジバト	〃	C
22	キジバト	〃	D	52	キジバト	〃	B	82	コジュケイ	〃	B
23	ドバト	〃	B	53	ヒヨドリ	〃	A	83	ドバト	01/4	B
24	キジバト	00/12	D	54	ヒヨドリ	〃	A	84	ドバト	〃	A
25	キジバト	〃	D	55	ドバト	〃	D	85	キジバト	〃	A
26	キジバト	〃	D	56	ヒヨドリ	〃	C	86	ドバト	〃	A
27	キジバト	〃	D	57	ドバト	〃	B	87	キジバト	〃	D
28	キジバト	〃	D	58	キジバト	01/2	E	88	ドバト	〃	B
29	カラスsp	〃	B	59	ヒヨドリ	〃	C	89	シジュウカラ	〃	C
30	カラスsp	〃	A	60	ヒヨドリ	〃	A				

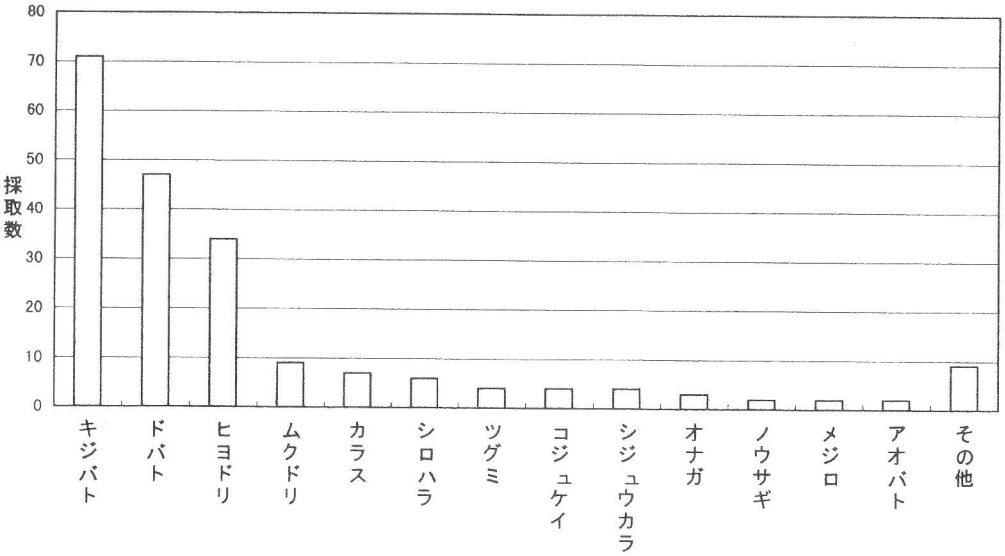

図１.オオタカの食痕の内訳

図１によると，ハト類が半数以上を占めていた．ハト類の羽は白っぽく量も多いため見つけやすく，２ヶ月程度は残っているので，ハト類は大半が確認できたと考える．また，本地域のオオタカはドバトよりもキジバトを多く捕っていることが明らかになった．図２に林床でのドバトの羽の食痕のようすを示した．

オオタカは小型鳥類も好んで捕食し，４割以上を占めるいわれているが(石沢･千羽,1967)，図１ではムクドリより小さい小鳥の事例が少ない．これはオオタカは中型以上の鳥は地上で羽を落すが，小型の鳥は樹上で直接食べてしまうことが多いためと想像される．オオタカのペリットで小鳥の羽や骨を含むものがあることは，それを裏付けているが，その発見は数が少ない．また，小型の鳥では１，２枚の尾羽や風切羽をよく見るが，それで食痕とは判断できず，まとまって羽を採取することは少ないために，今回の調査では確認率が低いと考えられる．

今回観察された中に，カラスspがあるが，本地域に生息するカラスの大部分はハシブトガラスである．ウコッケイは谷戸内に人為的に放たれたものが捕食されたもので，同場所では1998年にニワトリも同様に捕食されている．

また，越冬していたオオコノハズクが捕食されているが，同場所では1997年にコミミズクも捕食されている．更に，ノウサギが捕食されているが，オオタカの食性にはリス，ウサギ及びフクロウ類も含まれており(石沢･千羽,1967)，予想外の事実ではないが，この地域の豊かな自然を裏付けた例と見られる．

更に，秋季，冬季に比較し早春からの食痕の見つかる頻度は減少している傾向で，下草が増えることや雨量が増えることを考慮しても，繁殖期に変化があるようで今後の究明が必要であ

図２.林床に残されたドバトの食痕

る．

なお，今回の調査対象外であるが，この周辺地域で今回の記録にないヤマシギ，クイナ，ゴイサギ，コガモ，コゲラの食痕も確認されている．

2.利用している場所

表１，表２から食痕のあった場所の植生をまとめると，スギ，ヒノキを主とする針葉樹林が70件で最も多く，コナラ，クヌギを主とする広葉樹林は37件，両者の混交樹林は48件で針葉樹林と広葉樹林の中間を示す．モウソウチクを主とする竹林は41件，その他草地等は8件(何れも林縁から数m以内)であった(表３)．また，表３には調査対象地の面積比を土地利用図(源ほか，1999)より算出して示した．仮にオオタカが植生に影響されずに利用したとすると，面積比と同じ比率で食痕数が期待されるはずである．混交林と竹林については，ほぼ期待値と同じ割合で食痕が発見されたが，針葉樹林では期待値より多く発見され，広葉樹林では逆に少なかった．

このことは地上の見通しを悪くする下草が多い林を，オオタカは鳥の解体場所として好まないためと思われる．竹林はその点から針葉樹林と条件は大差無いと思われれるが，利用率が下がる．ハトの食痕の様子の違いを見ると，ドバトの食痕は47件の内，22件が針葉樹林内で最も多く，針葉樹林を好んで獲物を運び込んでいる．キジバトは71件の内，13件が針葉樹林内に対し，28件が竹林内で最も多く，針葉樹林よりも見通しがよく，密閉空間状態で狩がしやすのかもしれない．

また，この地域では2000年夏より大型建造物の建築が開始され，鉄筋３階建に隣接するコナラ林内では全く食痕が見つからなくなり，プレハブの背の低い工事事務所に隣接する竹林では影響が殆ど出ていないという結果も得られた．

表３.オオタカが餌の解体に利用した植生の割合

	針葉樹林	混交林	広葉樹林	竹林	草地、裸地等	合計
食痕の発見例数	70	48	37	41	8	204
上記の割合（%）	34.3	23.5	18.1	20.1	4.0	100
面積からの期待値（%）	16.6	18.3	36.6	17.9	10.6	100
面積（ｈａ）	3.9	4.3	8.6	4.2	2.5	23.5

謝　辞

現地調査では小河原順枝氏(故人 藤沢探鳥クラブ)，源文吉氏(日本オオタカネットワーク)，羽から鳥の種の同定では石亀雅子氏(日本野鳥の会 東京支部)，及び猛禽類の食性関係文献の参照では日本野鳥の会自然保護センターの古南幸弘副センター長，それぞれの方に多大の支援を頂いた．本紙面で心から感謝の意を表する．

引用文献

遠藤孝一,1996.那須野ヶ原のオオタカ.日本野鳥の会栃木県支部報,124:13.

石沢慈鳥・千羽晋示,1967.日本産タカ類12種の食性.山階鳥研報,

源文吉ほか,1999.遠藤地区土地利用図.